「アメリカ」へ向かった移民たち
―3つの映画にみる韓国移民たちの姿―

野　口　佳　美

序

私の韓国に対する興味は、1年次の言語選択で偶然、「みんなやっていないから」という理由で韓国語を選択したことから始まる。そして大学生活を通して留学生の友人を何人か持つようになり、その中でも韓国からの留学生達とよく交流をするようになった。私にとっては初めての本格的な異文化体験であり、すべてが新鮮で興味深いものであったことから、親交を深めたいと考えるようになる。

そのような中でも、一人の韓国からきた留学生と特に深い付き合いをもつようになる。1年間近くルームメイトとして一緒に暮らしながら、彼女の韓国での生活、家族や友人、日本での生活をはじめ、様々なことを聞いた。そして共にたくさんの思い出を作った。彼女の生まれた国である韓国に、ますます興味を持つようになった。

ささいなことだが、このような個人的な体験から、私は韓国に強い興味を持つようになった。そして、今回この卒業論文のテーマとして取り上げた3本の映画のビデオを、3年間お世話になった韓国語の先生から頂いた時、私は「韓

国」以外の韓国人たちの存在を初めて知ることになった。私は「韓国」といったら、海を隔てた隣に位置する、4764万人の人口をかかえる単一民族の国家のことであると考えていたからである。

近年、ワールドカップや映画、アイドルの活躍などを通じて、韓国は日本の人々にとって「近くて遠い国」から、段々と「近くて近い国」となってきた。韓国と日本の友好的な交流を進めようという動きは、年々強まってくるばかりである。しかしながら、私が体験したように、一般の人々が「韓国」について言及する時、それは無意識のうちに朝鮮半島の南に位置する「韓国」に限定されている。朝鮮半島の「韓国」は、韓国文化の中心であることには間違いない。しかしながら韓国が経験してきた歴史を考えると、朝鮮半島の「韓国」という枠は、韓国文化を理解するためには狭すぎるのではないだろうか。

朝鮮半島の南部に限定される「韓国」以外の「韓国」については、あまり注目されていないのが現状である。もちろん朝鮮半島の北に位置する朝鮮民主主義人民共和国は、世界情勢や朝鮮民族の分断問題などにおいて、当然多く取り上げられている。しかし、19世紀後半に飢饉と貧困から逃れようと旧ソ連に北上していったロシアの朝鮮民族や、日本の植民地支配により強制的に、あるいは半強制的に連れてこられた在日朝鮮人、日本占領下に実施された朝鮮半島の土地調査事業によって土地を失い中国へと向かわなければならなかった中国朝鮮族、成功を夢見てアメリカを目指した在米韓国人など、韓国の歴史とは切り離すことができない在外韓国人達の存在がある。彼らは「韓国」文化と無関係な、周縁の存在であるのではなく、むしろ反対に大きな影響を与えていると考えられる。

今回はそのような海外へ渡っていった韓国移民の中でも、特にアメリカへ渡っていった移民達に焦点当てていきたい。第二次世界大戦後に大きくかかわりを持つようになったアメリカと韓国の関係は、政治の分野だけに限らず、広範であり、かつ密接である。韓国の現代史はアメリカ抜きには語ることができない。アメリカへ渡っていった移民達を題材にした3つの映画を通して、どうしてアメリカに向かったのか、アメリカにおける在米韓国人の様子はいかなるものであったのか、そしてどのような移民があったのかということを明らかにしていきたい。

第１章　在米韓国移民の歴史とディープ・ブルー・ナイト

海外に住む韓国人は、1999年現在、世界14カ国に600万人[1]近い。そしてアメリカに206万人、中国に205万人、日本に53万人[2]が住み、海外に暮らす韓国人は主にこのアメリカ、中国、日本の３国に集中している。[3]

韓国と移住先第一位アメリカとの交流が始まったのは、19世紀末だった。19世紀中盤に世界的な奴隷貿易が終焉を迎えると、アフリカからの黒人奴隷のかわりに中国やインドからの出稼ぎ労働者がアメリカへと求められた。1882年までに34万人の中国からの移民があり、多くは大陸横断鉄道工事に従事し、１万人の建設労働者のうち約９割が中国人であった。これによりカリフォルニアの白人労働者は激しい排斥運動を展開、1882年にアメリカ史上初の移民制限法である中国人排斥法が制定された。そして中国人に代わって日本人移民が流入し始めるが、農場主に対する不満が募り、双方の葛藤が激化していく。韓国人移民に対する要求が表面化した19世紀末の状況はこのようなものであった。

韓国からの移民は、時期的に大きく５つに分けることができる。1882年から1902年の、韓米修好通商条約締結から移民が始まる前の第１期、1902年から1905年の、公的な移民が始まった第２期、1906年から1949年の、植民地時代と祖国解放後の半公式的移民期である第３期、1950年から1965年の、朝鮮戦争勃発と戦後の第４期、1965年から現在に至るまでの、アメリカ移民法改正後の第５期の５つである。[4]

第１期は、1882年から1902年で、1882年に韓米修好通商条約が締結されたことから始まる。1883年には最初の友好使節団がアメリカを訪問し、1887年に初めてワシントンに公館を設立、この時期から韓国の留学生、商人らの訪米が始まる。

第２期は、1902年の公式的な最初の移民船が仁川港を出港し、ハワイのホノルルに到着することから始まり、1905年まで続く。この移民が始まった背景は、以下の３つの特徴を持つ。第一に日本と欧米列強の半植民地状態のもとで、経済が極度に悪化していたことがあげられる。当時の朝鮮では労働人口の90%が農業に従事し、そのうち85%が小作農や奴婢として苦しい生活を送っていた。李王朝末期の朝鮮の政治は腐敗し、農業の不振が続いていた。第二に、ハワイの農場所有者が廉価な労働力を求めていたことである。以前から雇用していた中国人や日本人は、過酷な労働と低賃金に反発してストを起こしたり農場を離

れたりしたため、新たな労働力としての移民が必要だった。第三に、韓国にいたアメリカ人宣教師らが韓国政府にハワイへの移民政策を薦めたことである。国王の信望があつかった駐韓公使などが、労働者として従順で勤勉な韓国人に目をつけ、ハワイ農場主らの要望を聞き入れ韓国人を移民としようとした。これにより、国策として移民を推進することになる。ハワイ砂糖きび栽培協会の要請に応じるかたちで、移民事業を管轄する機関を設置し、「毎月15ドルの収入」などの広告を出すなどをして、移民を促進した。このようにして始まった公式の移民は、1905年に韓国政府が中止を命じるまで3年間続いた。この間、1903年に1133名、1904年に3434名、1905年に2659名、計7226名がハワイにわたり、内訳は男6048名、女637名、子供541名だった。[5] 移民達は契約労働者として行ったわけではなく、あくまで自由労働者であった。韓米修好通商条約では韓国人に対しアメリカでの居住、土地購入、住宅、商店の設立、職業選択などの自由を保障していが、そのことに関して知らない者が大半であった。そして、1905年11月、一部の斡旋会社が移民をメキシコに連れて行き、そのことから移民の惨状が本国に伝えられたことと、ハワイの日本人労働者が韓国人移民の中止を日本政府に要請したため韓国に圧力がかかったということから、政府は移民政策を中止する。

第3期は1906年から1949年の植民地時代と、祖国解放後の半公式的移民期である。1906年からアジア人移民が禁止される1924年までの間に、ハワイとアメリカ西部に渡った韓国人は2000名程度で、政治的亡命者や学生が大きな比重を占めていた。日本当局は徹底した武断統治をとり独立運動家を次々と逮捕していったが、逃れた人々は上海などに渡り、一部はアメリカに亡命した。また、「写真結婚」による女性は例外的に許可され、最初の新婦が渡った1910年から1924年の間で、1066人にのぼった。移民に対して寛容だったアメリカは、移民数の急増による労働者との摩擦、移民源の南・東ヨーロッパへの転換、「黄禍論」に代表される人種主義、戦争勃発による愛国主義の高揚などから、1913年カリフォルニア州で最初の外国人排斥土地法が成立したのを皮切りに、移民入国許可枠を各国に割り当てるクォーター制を導入した。1924年には入国許可総数を1万5000人に制限、各国への割り当てを大幅に減少させる移民法改正を行う。この改正は西半球のメキシコ、中南米、カナダ、および東洋系ではアメリカの植民地であったフィリピンが割り当ての適用外とされ、人種差別の性格を帯びたものだった。この改正が行われた1924年から1945年まで、韓国人はアメリカの大学に入学する学生を除いて誰も渡米することができなくなり、年間20

人にも満たない状態となる。そして第二次世界大戦が終了した1945年当時、在米韓国人の総数は約1万人で、そのうち70%がハワイ、30%がカリフォルニアに住んでいたとされている。

第4期は、1950年から1965年の朝鮮戦争勃発から戦後期にかけてである。第3期までの移民構成に変化が生じ始めたきっかけは、1950年に勃発した朝鮮戦争であった。第4期の15年間で1万5419人の韓国人が米国で永住権を取得するが、その内訳は在韓米軍兵士と結婚した女性が6423人、アメリカ市民によって養子縁組された戦争孤児が5347人、留学生が3278人というものであった。在韓米軍兵士の妻と戦争孤児だけでこの間の永住権取得者の78%を占める。また、孤児の養子縁組は一般的に女の子が歓迎されたので、当時の移民は女性が3分の2以上を占めていた。

第5期は、1965年におけるアメリカの移民法改正から、現在に至るまでの期間である。1965年、それまでのアジア移民を制限してきた国別・人種別移民割り当て制度は、民主主義の基本原則を侵したものであるとし、新移民法が制定される。新移民法は移民流入数の大幅な増大を意図したものではなく、クォーター制度上の人種差別をなくしたことを意味する。年間の受け入れ制限数を東半球からは17万人、西半球からは12万人の計27万人、また一国あたりの年間入国許可数の上限を2万人と定めた。これによってラテンアメリカとカナダからの移民が初めて制限されると同時に、アジアからの移民禁止状態が撤廃される。新移民法は従来の国別割り当て制度にかわって、移民許可の優先制度が設けられた。第1順位は市民権者の未婚子弟、第2順位は永住権者の配偶者及び未婚子弟、第3順位は科学及び芸術分野で特殊な能力や該当職業を持つもの、第4順位は市民権者の既婚子弟、第5順位は21歳以上の市民権者の兄弟姉妹及びその家族、第6順位は短期雇用熟練・未熟練技術者およびその家族である。ただしアメリカ市民の直系家族は枠外として移民を認められた。また海外の米国政府機関の長期勤務者や牧師なども、特殊移民としてクォーターから除外された。「兄弟姉妹法」という通称の通り、近親者に優先権が与えられた。

この移民法の改正には、黒人たちの公民権運動が大きく関係している。アメリカでは黒人に対して、同等の権利、施設さえ与えられていれば人種差別は憲法に沿うという、分離平等政策がとられていた。しかし1954年に、人種別学は違法であるというブラウン判決が下される。1955年にはジム・クロウ法に規定されている黒人客と白人客の客席分離に反対するバスボイコット運動が起こったことをはじめ、教育、雇用、住居、選挙などあらゆる分野における人種差別

に反対し、白人と同等の権利を要求する運動が全米に拡大する。そして1964年に教育、公共施設の使用などに関する差別を禁止する、公民権法を成立させた。また1965年には投票権法により選挙権登録の差別が撤廃され、黒人が自由に参政権を行使できるようになるなど、過去と比較すると目覚ましい成果をあげた。このように黒人に対する差別が否定されると、あらためてあらゆる種類の差別問題が浮上してきた。機会の平等だけでなく、結果の平等まで求められるようになり、移民法の改正、社会保障の拡充、環境保全など広範囲にわたる法律が次々と制定されていったのである。また、新移民法が制定されたのは、公民権運動の高揚とともに、60年代以降急速に発展した経済復興にも要因があった。アメリカは多くの労働者、とくに医療系専門職に従事する技術者を必要としていたが、ヨーロッパ先進国で専門職についている者はアメリカへ移民する必要が無かった。反面、アジアや非ヨーロッパ系諸国では多数の医師、看護婦などがアメリカへの移民を希望していた。このように以前の移民法では需要と供給に対応しきれなくなっていたことも原因であった。実際に改正法が運用されるようになると、「兄弟姉妹法」の特徴から、移民者数は年間27万人の枠をはるかに超える結果となる。そして1950年代にはアジア系移民は全体の６％である15万人に過ぎなかったものが、80年代には46%の250万人に達した。

1965年の改正後、韓国からの移民構成にも大きな変化が現れることになる。韓国人のアメリカ移民は、海外移住法が改正された後の1970年代に入ってから本格的に始まった。1970年代当時の在米韓国人総数は約７万人だったが、この頃から年間の移民者が１万人に達し、さらに1973年からは２万人代、1976年からは３万人代という高い伸び率をみせる。これは招請移民が許可されることになってから、アメリカ市民権を得たものは希望すれば本国に住む家族を招請でき、その家族は移住が許可されたことによる。

実際に韓国人の移民は70年代初期には就業移民の方が比重が高かったが、その後は家族招請のほうに比重が移っていく。70年代と80年代を比較してみると、家族招請の移民の比率は23.5%から58.7%に増加したのに反して、就業移民は30.8%から2.9%にまで減った。その他の約40%はクォーターから免除される市民権者の直系家族や、特殊移民として永住民となった人々である。アメリカの経済の不況に伴い移民政策に変化があり、80年代は家族招請の移民は減少しつつも20%以上の比重を維持しているのに対し、就業移民は事実上不可能になった。アメリカは不景気により失業者が増えると、1978年からごく限られた分野を除いて就業移民の許可を中断、さらにその後医療系技術者の移民を大幅に制限

した。このため70年代初期には急増していた韓国人医師や看護婦は新規入国ができなくなるなど、その後も就業移民としての渡米はきわめて困難となった。

このように新移民法が始まってから、1970年にアメリカに暮らす韓国人の数は約７万人、83年にその10倍にあたる68万６千人、1990年に約153万人、1999年には206万人達した。80年代から90年代半ばまで移住の勢いは弱まらなかったが、韓国の経済成長と国家としての成長をみた90年代後半には、年平均1万人台と移住の勢いは弱まる傾向にある。

1984年に製作された『ディープ・ブルー・ナイト』（배창호, *깊고 푸른 밤* 1984）は、まさに70年代から80年代にかけて一番移民の伸びが大きかった時期に製作された映画である。この映画を通して当時の韓国における移民熱と、居住先として選ばれるアメリカとの関係を明らかにしていきたい。

ディープ・ブルー・ナイトは、韓国において1985年当時の興行成績としては最高の、約50万人を動員したという大ヒットした作品である。さらには85年のアジア太平洋映画祭グランプリの脚本賞、大鐘賞優秀作品賞をはじめ、数多くの賞を受け注目された映画だ。監督の裵昶浩は80年代の代表的な人物で、興行としての映画という意識を監督としての主張と両立させて社会状況の変化や世間の嗜好をうまくつかみ、ヒット作を数多く生み出した。特に今回取り上げるディープ・ブルー・ナイトは、内容があまり充実していなかった今までの韓国の国産映画とは趣が異なり、商業的要素と監督の主張とのバランスがうまく取れた作品となった。以下はディープ・ブルー・ナイトのあらすじである。

映画の冒頭、主人公ホビンは韓国人女性とともにデス・バレーを車で走る。車を停めて人気のない荒野の中で肉体関係を持ったあと、ホビンは韓国人女性に暴行を加え、持参していた２万ドルを奪って置き去りにし、ロサンゼルスに向かう。主人公ホビンは、アメリカで成功するためにはどんな手段をもいとわない人物である。永住権を取得して最愛なる婚約者を韓国から呼び寄せるためには、犯罪に手を染めることも他人を裏切ることも辞さない。韓国で身ごもっている妻に対しては誠実なる愛情を抱き、完全なる信頼をよせているが、アメリカでのホビンは他人に対して徹底的に利己的な姿勢をとり、自分のために利用すること以外を考えない冷徹な人物として描かれている。

ジェーンはロサンゼルスのバーで働く在米韓国人であるが、副業として偽装結婚をして永住権を男に取得させるというビジネスをしていた。在韓米軍兵士だった黒人のマイケルと結婚し、アメリカに渡ってから一人娘のローラをもう

けていた。彼女は裁判で親権を失ってから、何度も結婚はするものの夫達とはビジネスとしての関係のみとして生きている。そこに白人の中年女性が偽装結婚の相手として持ちかけてきた、ハンサムで金持ちという触れ込みの男がホビンだった。彼女はホビンと偽装結婚をし、永住権を取得するまで同居をして夫婦生活を送るかわりに、金を受け取るという契約を交わす。

永住権を取得するまでの、二人の契約による偽の夫婦生活が始まる。ホビンはビザが切れていることから不法就労者として働く。当初彼は車の解体屋で働いていたが、ある時不法就労の取り締まり捜査にあい、逃げ出さなくてはならなくなる。仲間が何人も捕まり、銃弾をかわしながら命からがら逃げ切るが、彼はアメリカでの危うい立場の生活があまり楽ではないということを自覚する。結局ジェーンの紹介で、スーパーマーケットの店員の仕事を得て、彼はアメリカでの目的達成のために働くことになった。

ジェーンが4年間に5回も結婚と離婚を繰り返していることから、ある時移民局から突然の家庭訪問調査を受ける。今まで家にまでは調査に来たことが無かったため、唐突な訪問にたじろぎながらも、二人は口裏を合わせる。二人の移民局の職員が現れて個別尋問が始まると、はじめのうちは口裏を合わせていたことからうまく受け答えできていたが、最後のほうには妻であるはずのジェーンの韓国式名を知らないことや、彼女の実際の年齢がわからないことが暴露され、調査官の追及をかわしきれなくなりそうになる。しかしながらついに調査官の尋問に観念するかと思った瞬間、ジェーンへの愛とアメリカに対する思いを熱く語りはじめ、星条旗よ永遠なれを熱唱しアピールすることによって、間一髪で危機を乗り越える。このようないくつものハプニングを乗り越え、永住権を手に入れる機会をジェーンとの結婚生活を送りながら待つ。

ついに念願の永住権を手に入れると、彼は韓国に残してきた、身重の婚約者を呼び寄せるために、ジェーンに離婚を要求する。しかしながらジェーンは離婚の要求に応じない。二人の結婚生活は単なる取引であったはずだが、時間が経過するに従って二人の間は個人的な関係に発展していたからだ。ジェーンはアメリカ社会での孤独感からや、数日間ではあったが娘ローラと遊ぶホビンの純粋な一面を見たことなどから、今までのビジネスのはずだった結婚生活を通じて彼を本気で愛するようになってしまうのである。さらにジェーンは彼の子供を身ごもったと告白し、彼との幸せな結婚生活を望むようになる。映画の折り返し地点にさしかかるこの頃には、彼女はホビンにとって単なる邪魔者でしかなくなってゆく。彼女が離婚に応じないという予期せぬ事態になったことを

はじめとして、ホビンのアメリカでの計画がここから少しずつ狂い始めていくことになる。韓国の婚約者から時折送られてくる肉声のメッセージテープは、徐々にホビンに対しての疑いの気持ちと、不安な気持ちを伝える内容で占められ、彼の成功や財産よりも彼の存在と愛を求める悲痛なものとなっていく。

スーパーマーケットで仲のよかった韓国人の同僚は、オーナーがホビンを信用して昇進させていくのに対して嫉妬心を抱くようになる。韓国で結婚することになり、オーナーに資金前借りを申し出るが、彼は信頼を得られずに断られてしまう。根に持つ上に少々卑劣なことでも気にしない性格の彼は、冒頭に被害にあった韓国人女性が在米韓国人向けの新聞に出している人探しの記事があったことを思い出して連絡をとり、ホビンの居場所を教えてしまう。ホビンを売って、彼はお金を得ようと画策したのである。

ホビンにアメリカで働いて貯めてきた有り金を奪われ、夫もそれが原因で自殺した韓国人女性は、居場所を突き止めたホビンを追い始める。ホビンに会う前に偶然ジェーンと接触することになり、ホビンの彼女に対する非道な行為や、彼の残酷な面などを伝えて警察に訴えると言うが、ジェーンはホビンが奪った金額を肩代わりして事を内密に収めることにする。そんなジェーンの愛情も通じずに、彼は流産をさせようと怪しげな薬をスープに混ぜようとしたり、谷から突き落とす想像をしたりと、ジェーンに対しての憎しみを募らせ、なんとか始末しようと画策する。ホビンは彼女に韓国にいる妻とおなかの子供が死んでしまったと嘘をつき、サンフランシスコにて二人でやり直そうと提案をする。しかしサンフランシスコに向かう道とは違う方向へ走りだし、人気のない荒野にて、今までの計画が狂った発端であるという恨みと、子供を産めなくしようとする目的からジェーンに暴行を加える。この時ジェーンの告白から、実は彼女が身ごもったということは狂言であることが発覚し、彼女を殺さないで離婚を達成しようと車に戻る。車に連れ戻された時に、ジェーンはホビンあての封筒から抜き取った韓国の婚約者のメッセージテープを、自動車のカセットデッキでおもむろに再生させるが、思いがけない内容にホビンは衝撃を受ける。ホビンを待ちきれないことから、韓国の婚約者は子供をおろし、違う男性と結婚するという決断をしたということだった。殺されかかったにもかかわらず、ジェーンは全てを白紙に戻してもう一度サンフランシスコで人生をやり直そうと訴えるが、ホビンは狂ったような笑いを浮かべながら車をUターンさせて逆方向に向かって走らそうとした。ジェーンはそんな彼の頭部に銃弾を打ち込み、自分自身のこめかみに銃を当てるところで物語が終わる。

主人公のホビンは極端に描かれているが、70年代から80年代にかけて急増した移民たちの一面をよくあらわしてしているといえる。韓国ではアメリカへの移民熱が高く、彼のようにアメリカン・ドリームを夢見た者は少なくない。1970年代後半以降、特に1980年代以降から現在までの韓国人のアメリカへの移住や渡航には、アメリカでの更なる生活水準の向上と成功という新たな移住動機が加わった。1965年のアメリカにおける移民法改正と韓国における法改正が一番の原因ではあるが、移民が増えた要因となった当時の韓国の背景をいくつか考えてみたい。

第一に社会的要因である。韓国では1960年の４.19学生革命によって李承晩政権が倒れたが、1961年に軍事クーデターが起こり朴正熙が政権を握る。朴政権は軍事独裁体制をしき、反対勢力を徹底的に弾圧した。特に1972年10月の「維新憲法」制定以後、彼はさらに権力を集中させ、独裁を強めていくことになる。特に70年代後期の朴政権はその傾向が強くなる。そして統一と民主化を求める人々を次々と逮捕するなどして弾圧を加えたため、軍事政権と民主陣営間の衝突が連日繰り返されているという不安定な状況であった。

第二は経済的要因である。政情不安に伴い、韓国経済も危機に直面していた。極端な外資導入政策は裕福な人は益々富み、裕福でない者は益々貧窮化する事態を生み出した。国内産業の脆弱性と内資の不足を無視し、輸出志向工業化政策を推し進めることは、財閥と政権が癒着し労働者に低賃金を強いる結果となった。政府に圧力をかけられ組織的に抵抗することもできず、代表者を政界に送ることもできない都市労働者は貧困にあえいでいた。また工業中心の経済政策により農業は低迷し、農村は荒廃した上、離農民の流入によって都市の人口は爆発直前となっていた。

第三に子供の教育への関心の高さがあげられる。韓国ではもともと教育熱が高いが、社会・経済的不安が高まるにつれて学歴偏重主義が一層深化した。親は子供の出世のためにアメリカへ留学させようとし、子供はアメリカ留学に憧れをいだいた。留学すれば軍隊への徴兵義務から逃れることもできるという利点もあった。

これらの理由により、アメリカを居住先として選ぶ移民は後を絶たない。しかし、ディープ・ブルー・ナイトを取り上げることによって、もうひとつ重要な要素が見えてくるのではないかと考える。それはアメリカに対する極度のあこがれと過度の期待にみられる、理想としてのアメリカ観である。映画中のいくつかの場面をみながら考えていきたい。

移民としてアメリカを目指した主人公ホビンは、アメリカに渡りさえすれば、立派な車と大きな家が手に入ると信じていた。その証拠に、彼がアメリカに来てからの具体的な計画について映画の中では一回も触れられず、生活は成り行きに任せているに過ぎない。また市民権を得た後に、どのようなアメリカン・ドリームを達成するのかということにも触れられていない。これは韓国の人達が、当時アメリカに対して盲目的に抱いていた理想が映像化されている場面であると考える。また同じようなアメリカのイメージが読み取れる部分は、他にホビンとジェーンの生活は全てがアメリカの文化にのっとっていることがあげられる。ジェーンの家はアメリカの中流と同じような大きな家であるが、韓国文化を感じさせるようなものは何も無い。また彼女が着ているドレスやバスローブはすべて「アメリカ風」であり、彼女が口にするアルコールもウイスキーやワインのみである。お互いの呼び方も「Jane」「Mr. Back」というように徹底していて、韓国語で会話していること以外彼らから韓国人であるということは微塵も感じられない。このような描写の中にも、当時の観念としてのアメリカ観が垣間見えるといえる。

当時の韓国におけるアメリカに対する考え方は、どのようなものだったのであろうか。最近では韓国において大規模なアメリカに反対するデモが起こったりしているが、実は1980年以前の韓国においては、現在にあるような激しい反米感情は全く見られることがなかった。「80年代以前の韓国人の米国観は“幻想”と“神話”に満たされていて、韓国において反米スローガンを見出すことはできなかった。文字通り“美国”は美しい国という思いが、一つの進行のように韓国人の思考を支配していた」という状態であったという。[4] 70年代末まで西洋といえばアメリカを意味するほどで、アメリカに対して疑問をもつ韓国人はほとんどいなかった。これにはいくつかの原因があると考える。

第一に政治的な問題である。朝鮮戦争では、共に血を流して韓国を共産主義の侵略から守り、韓国人は米国との関係を「血の同盟関係」と呼ぶようになる。韓国国民にとってアメリカは窮地を救ってくれる援軍として映ったのである。そして「韓国とアメリカは三度の戦争を共に戦った同志」というように、第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争の三つの戦争を、韓国はアメリカと共に経験した。[5] それ以来韓米同盟は韓国の安全保障の基盤であり、韓国外交の基軸となり、親密な同盟関係が築かれてきた。東西冷戦体制の枠組みでの、共産主義北朝鮮との軍事的対立関係の脅威のなかで、アメリカの支援を無しでは北朝鮮に対抗できないという恐れから、その後も強い関係を持たざるを得ない。

韓国にとってアメリカの軍事力は、国の防衛にとって必要不可欠なものであった。このことから政治的に強い影響を受けざるを得なかった。

第二に経済的な問題である。米国は韓国製品を購入・消費する最大の市場であり、韓国経済にとって大きな役割を果たしていた。また、1945年から61年までの16年間に31億ドルにまで及んだように、アメリカの経済的援助も多大なものであった。韓国にとって経済の急成長を成し遂げるためには、アメリカの存在が不可欠であったのである。

第三に韓国における情報と教育の問題である。朝鮮戦争時、戦線の往復により南の左翼活動家の多くは北朝鮮に移らざるを得ず、韓国においては反共の一枚岩体制が確立した。そして戦後の韓国では、イデオロギー教育によって人為的にアメリカは友邦で血盟の国とされ、「反共」の名のもとにアメリカ批判はタブー視される状況となった。軍事独裁政権下の80年代までは、アメリカに批判的な意見を表明した場合、反共法違反によって逮捕される恐れがあった。また、海外の情報を反共法のもとに遮断し、一般国民の海外渡航は厳しく制限された時代であった。これらのことから、80年代以前の韓国において反米感情はほとんど見られない。

この理想としてのアメリカ観はホビンのみならず、実際にアメリカに移民していった人達に程度の差こそあれ影響していたに違いない。そして成功を夢見た移民の比率を高めるのに大きな役割を果たしたと考えられる。このことがこのディープ・ブルー・ナイトから読み取れる、韓国からの移民の姿ではないだろうか。

しかし、80年を境に、このアメリカ観は大きく変化することになった。韓国におけるアメリカ観が変化した直接の原因は、1980年に起こった光州事件に求められる。韓国の軍隊が戒厳軍として動員され、デモ隊を武力鎮圧して数多くの市民の死者を出したこの事件で、全斗煥率いる韓国軍の移動に許可を与えたのが在韓米軍であった。朴正熙大統領が暗殺された1979年10月頃から、韓国全土で民主化を求める運動が盛んとなる。この民主化運動の高まりに危機感を強めた韓国軍部が、戒厳令の全土拡大を発表し、学生運動指導者や金大中ら有力政治家の一斉拘束などの強硬措置をとった。伝統的に反権力色が強く金大中の地盤である全羅南道の光州市では、学生、市民らが反発して大規模なデモを展開し、鎮圧に投入された軍隊との間で市街戦に発展する。軍が制圧するまでに、この戦いにより政府の発表では191人、光州市の発表では2627人という多数の市民が虐殺された。韓国軍の作戦権は在韓米軍司令官の管轄であることから、

アメリカの了解なしには起こらない事件と考えられた。このことから戦後初めて、韓国にとってのアメリカとはなにか、という疑問が提起されるようになる。この事件直後は報道管制によって、一般市民は真実から遠ざけられていたことからアメリカ批判が生まれてこない状況であったが、1982年の釜山アメリカ文化院放火事件、85年のソウルアメリカ文化院占拠事件などから反米闘争が一般市民へと広まっていく。

そしてこれらの反米感情を決定付けた間接の原因は、アメリカという国の見直しにより、客観的な理解が深まったことであると考えられる。1980年の光州事件まではアメリカのことを観念的に見ていたが、この事件を境に、第二次世界大戦後の歴史とアメリカとのかかわりを客観的に分析するようになる。第二次世界大戦後の朝鮮半島分断の一原因であったこと、独立後の朝鮮半島の統治方針は韓国民主主義を育てるものではなかったこと、朝鮮戦争の拡大、李承晩、朴正熙、全斗煥など歴代独裁政権に対する支援を行ってきたことなど、今まではあまり表に出て来なかったことも研究されるようになる。韓国の民衆は歴史に深く関わってきたアメリカを認識した。韓国と北朝鮮への分断、そして韓国内における独裁政権の維持する「分断体制」は、アメリカとソ連を中心とした国際情勢なしには成り立ち得なかった。韓米行政協定改定問題、龍山米軍基地移転問題、作戦統制権委譲問題、駐韓米軍駐屯経費分担問題、アメリカの市場開放要求など次々と問題が噴出し、それまでの「美しい国アメリカ」というアメリカ観は崩壊していったのである。

この映画のもう一つの特徴は、先にあげた70年代までの観念的なアメリカ観のほかに、やるせないほどの悲劇的な結末に終わることである。ホビンが市民権をとるまでの前半の順調な進みから殺される最後の急転落までは、観客に対して幸福感のかけらも残さない。非人道的で利己的な設定であるホビンという人物、また在韓米軍の妻としてアメリカに渡り、結局偽装結婚のビジネスという商売を営むジェーンという設定の人物が、このような結末を迎えたことから読み取れることは、まさにこの韓国におけるアメリカ観の転換なのではないだろうか。アメリカに滑稽なまでにあこがれているホビンを描くことによって、アメリカ観の転換前の韓国民衆を暗に描く。そしてアメリカへ溶け込むことのできなかったジェーンと、その後夢がかなわずに転落していくホビンを描くことによって、アメリカにあこがれ移民していく者達へ疑問を投げかける。そしてこの疑問を通して、今までの韓国とアメリカ両国間の関係に対しての疑問をも投げかけていると考えられる。この映画が製作された当時の韓国民主化の高

まりと、自由と成功を求めた移民達の増加という時代背景をよくあらわしている作品であるといえる。

第2章　ウェスタン・アベニューにみる在米韓国人移民とアメリカ

ディープ・ブルー・ナイトを通して、移民が急増した70年代、80年代の韓国の様子と韓国におけるアメリカ観についてみてきた。それでは、アメリカへ移民していった者達の実際の生活はどのようなものであったのだろうか。ディープ・ブルー・ナイトの約8年後である1993年に製作された『ウェスタン・アベニュー』（장길수, 웨스턴 애비뉴 1993）を通して、移民していった者達のアメリカでの実際の生活についてみていきたい。以下はウェスタン・アベニューのあらすじである。

両親、長男フランク、次男バビとともに、末娘である主人公ジスは、幼い頃アメリカに移民してきた。両親は以前からロサンゼルスに店を構えていたマーケットにて身を粉にするようにして働き、ついにその店を継ぐことになる。店では、父と母、そして従業員として雇っている黒人ルイスの3人で切り盛りしながら、小さいながらも彼らなりのアメリカン・ドリームを実現することができたのであった。ジスはマリアンとジスという二つの名前を使いながら、アメリカの学校に通いながら幼少期を過ごす。店で働く黒人のルイスには、一人息子のノーマンがいた。彼は母親が家を出て行ったうえ、友達もできずに孤独であった。自然とジスとノーマンは親友となり、お互いに好意を持つようになる。子供時代は、二人で遊びながら過ごし、時が経っていった。

長兄フランクは小さい頃から優等生で、両親からの期待も大きい模範的な息子である。両親の韓国的な価値観にもよくなじみ、学歴もあり、堅実で順調な人生を送っている。一方次兄のバビは自由奔放で、大学には進学せずに、運転手をしながら一人で生計を立てて生きている。彼は自分自身がやりたいように生きていくことが大事であると考えており、両親の保守的な思考と常に反発している。両親とはけんかばかりで、勘当状態に近かった。長兄フランクと花嫁セリの結婚式では、久しぶりに一同が会するが、バビは遅刻をしたうえに正装もしてこない。このため両親は花嫁の両親から嫌味を言われるなど、面目を潰され、恥をかいたと感じた父はバビに対して怒りを募らせる。子供達の進む道、

特にバビについて家族内で議論が勃発する。しかし問題を抱えているのはバビだけでなく、ジスも同様であった。当初はバビを擁護しながら両親をなだめていた彼女だったが、彼女は自分自身が生きる道について迷いを持つようになったことを告白する。医者になるために通っていた医学部を退学し、俳優の勉強をしたいという考えを両親に打ち明けたのだ。ジスの主張に驚いた両親は、安定していて世間体もよい医師の道を捨てることに、猛反対する。兄フランクもアジア人が俳優になるということは不可能であり、自分がアメリカで育ったからといって成功できると考えてはいけないとジスを諭すが、彼女は東洋系に見えない天井があろうとも突破してみせると言って諦めない。議論の末に父に勘当を宣言されるが、結局自分自身の生き方を貫いて俳優を目指すために、家を出て勉強する決意をする。

両親と喧嘩別れして家を出てからは、恋人であり映画監督を目指している白人のスティーブとともに住みながら、大学のシネマスクールに通う生活を送る。映画を学ぶものの中で、東洋系の女性は非常に珍しく、様々な偏見を受けることもあったが、アルバイトをして稼ぎながら前向きに勉強を続ける。ある時スティーブがシナリオを思いつかず悩んでいる時に、ジスが画期的なアイデアを提案する。これをきっかけに、彼女のアイデアを使った芸術映画を二人共同で作りはじめ、彼女が主役として演技をし、異国情緒あふれる斬新な映画が完成する。力を注いで作った結果、発表会ではとても高い評価を受けることになる。しかしながら発表会場にて、彼一人が監督であり映画を作ったとして、映画成功の栄誉を独占してしまうという裏切りにあう。映画の大半を作ったという自負があるジスは、自分が認めてもらえないという口惜しさと、愛しているといったスティーブの裏切りから、失意のどん底に陥ることになる。さらに、今までこらえていた東洋系に対する白人のクラスメートたちの偏見や無知、差別に対しても嫌気がさし、支えを失ったことで、耐えられなくなっていく。悲しさと苦しみに抗えず、気を紛らわそうと麻薬やセックスに身をゆだねる生活が続く。誰にも手を差し伸べてもらえず、生きる希望もなく孤独に破滅していきそうなところであったが、ついに次兄のバビが彼女の消息をつかみ、彼女を取り込んでいたアジア人の男のもとに単身乗り込んで救出し、両親の待つ家に連れ戻す。

実家に戻り落ち着いた生活を送るようになったジスは、父の店であるマーケットの仕事を手伝いながら暮らすようになる。店では一度怠惰から解雇されたルイスも、改心して働くようになっていた。また昔のように家族の暖かさを感

じながら、日々が過ぎていった。

ある日、幼い頃一緒に遊んでいた親友ノーマンと再会するが、意外なことに彼は韓国人に対して嫌悪感を隠さない。その頃、黒人少女ナターシャ・ハーリンを射殺したトゥ・スンジャの執行猶予の判決に、韓黒関係が悪化していた時であったからである。キム一家の営むマーケットがある地区はダウンタウンであり、貧困層の黒人たちが多かった。そして、韓国人女性店主が黒人の少女を射殺したこの事件が繰り返し放送されていたことによって、従来からの韓国人に対するねたみと重なって韓国人に対する憎悪感情が高まっていた時期であった。また、警察官が黒人の青年に過度の暴行を加えたとされるロドニー・キング事件が大々的に放送され、判決がどのような方向に向かうのか、世間の関心が急速に高まっていた。このことから黒人の運動が活発になっていた時期でもあった。ノーマンは当初ジスに対してもよそよそしい態度をとり、父ルイスに対しても韓国人の店で働くことはやめろとの主張を繰り返していたが、ジスとの再会により韓国人に対する態度が和らいでくる。次第に幼い頃のお互いの近かった距離を思い出し、彼女を人種という枠を超えて理解し、愛するようになる。ジスも昔に戻った素直なノーマンに惹かれていく。

ノーマンが顔を出していた黒人の集会では、ロドニー・キング事件の判決を、ダウンタウンで迎えようということになる。ノーマンはキング牧師のように非武装で自分たちの考えを主張すべきだとするが、急進的な他の仲間たちはそのようなやり方は時代に合わないとし、各自の思ったとおりに行動することを提案する。そして、ついに判決の日、ロドニー・キングに暴力をふるった警官全員に、陪審員たちは無罪の判決を出したことがテレビで放映される。これをきっかけに始めから街に集まっていた黒人達だけでなく、抗議を叫ぶ他の黒人達も集まり始め、大規模な群衆となっていく。そして夜になるとついに一部が暴徒化し始める。

ジスの父は人生をかけて作り上げてきた店を暴徒から守るため、タウンに残り銃を持って戦うことを決意する。ルイスは黒人であるけれども、ジスの父に対する友情から店を共に守ることに決める。黒人達が押し寄せ投石などを始めたことに対して、威嚇射撃などによって牽制するがついに銃弾が切れる。ジスが必死で助け求めて警察に電話するが、彼らは全く取り合わない。そして長兄フランクは、危険であるということからジスに対する電話に居留守を使い、助けには来なかった。店に侵入されるかという瞬間、なんと勘当されていた次兄バビが銃を持って加勢するために駆けつける。父と息子は家族の絆を再確認する。

いつまた襲撃にあうかわからないことから、バビはジスを郊外の家に車で送っていくことにするが、途中で暴徒たちに捕まり危機に陥ってしまう。そこにノーマンが助けに来て、彼のおかげで逃げ切ることができる。ノーマンは暴動という悲惨な事態に怒りながら、街を破壊して暴力に訴えても何の解決にもならないと、黒人の仲間達に力いっぱい訴える。しかし思いは通じずに、力を用いることを支持する仲間達から反感をかい、逆上した一人に銃で撃たれて死んでしまう。

父とルイスが守るマーケットはしばらく静かであったが、ついに銃と火炎瓶で武装した車が本格的に襲撃にくる。店には火がつけられた上、ルイスは足を撃たれて負傷する。車は何回か往復してマーケットを襲撃して去っていった。その時、道路閉鎖と暴徒のためにダウンタウンから出ることができなかったジスとバビが乗った車が、店に近づいてくる。しかし父は彼らが自分の子供達とは知らず、武装した男達がまた戻って来たと勘違いし、二人の車に向かって怒りを込めて銃を乱射する。銃弾によりバビは即死、ジスも重症を負う。燃え上がる店と車の前で泣き叫ぶ父を、ヘリコプターの照明が照らし出す。そして最後に、ジスがバビとノーマンの墓石の前に静かにたたずんでいる場面で終わる。

ウェスタン・アベニューは、70年代と80年代にアメリカに渡って行った人達の実際の暮らしを、設定や時代背景といった点において、ディープ・ブルー・ナイトよりもより正確に再現しているといえる。例えば、ジスの両親がマーケットを営むということは偶然ではない。マーケットの経営は、在米韓国人から連想される典型的な商売であったことからだと考えられる。この時代にアメリカにわたった移民達は、どのような人達であったのだろうか。

1980年度の韓国統計局資料によると、韓国では25歳以上の成人で四年制大学卒業者は6.8%だったのに対し、アメリカ移民者では32%を占めた。このことから移民達の教育水準は比較的高いことが見て取れる。職業面においても韓国で労働であった者は15%にすぎず、専門職、事務職、経営職に従事した人々が大半であった。しかし医師や看護婦などの特殊な専門分野などを除いて、アメリカにおいては一般的な専門職、経営職、行政職についていた移民者はほとんど同種の仕事を続けることができなかった。不自由な英語力、韓米間の技術格差、雇用側の人種的偏見などのため、大学出身者でも大半は底辺の労働職やサービス職への就職をしなくてはならなかった。このことから、韓国人の多くがクリーニング店、レストラン、果物屋、ネイルサロンなどの商店の経営者になった。

また、韓国人の同胞相手に少ない資本で始められる商売として、適当な業種であったことがあげられる。1986年の調査によると自営業が47.5%、韓国人企業・店舗に雇用されている者が27.6%、アメリカ人企業に雇用されている者が25%であった。そして、土地代などの関係から黒人やラテンアメリカ人居住区に店を出すことが多かった。

そのような在米韓国人が一番集中して住むのが、映画の舞台であるカリフォルニア州南部のロサンゼルスである。ロサンゼルスには30万人ほどの韓国人が住み、コリアタウンを形成している。彼らがロサンゼルスに住むようになったのは、西海岸が朝鮮半島に近いという地理的な条件と、移民初期にハワイに移住した韓国人達のうち、約1000人がサンロサンゼルスやフランシスコへと再移住し同胞社会を形成したことによる。1981年には、オリンピック通りを中心に東西約1キロ、南北約0.5キロの範囲を市議会によってコリアタウンであると認定され、90年代にはコリアタウンは約8万人規模となった。東へ約3キロでダウンタウンに至り、北へ5キロほどでハリウッド、北西へ8キロのところにビバリーヒルズといった白人のビジネス街や住宅地が存在し、逆に南のほうへ4キロほど行けば、サウスセントラルからワッツにいたる黒人多住地域が広がっているという位置関係にある。コリアタウンの住人の80%以上はヒスパニック系が占めていて、ロサンゼルスではほとんどがメキシコ系である。コリアタウン内がロサンゼルス一の犯罪多発地帯ということから、韓国人は郊外に住居を持つのが一般的で、昼はコリアタウン、夜はヒスパニックの町という二面性を持っている。韓国人で居住しているのは渡米後あまり年月が経っていない人などであり、コリアタウン内の人口の20%未満となる。

このようなロサンゼルスを舞台にした映画、ウェスタン・アベニューから読み取れる3つの特徴を通して、アメリカに渡って行った移民達の様子を明らかにしたい。

この映画の中に見られる第一の特徴は、ジスの家族の中における価値観の多様性である。家族の価値観が一番ぶつかったのは、長男フランクの結婚式後の、ジスとバビの将来についての4人のあいだで開かれた家族会議においてであった。そして、あらすじにある通り、ジスが俳優の勉強をするために医者の道を捨てたことに対して、父親と母親は大反対し勘当を言い渡す結果となる。父親と母親、長男フランク、末娘のジスは、どうしてあのように生き方に関して考え方の相違が生まれてきたのだろうか。

ジスの父親と母親がアメリカへやってきた時、すでに結婚し、3人の子供が

いた。彼らは韓国において人生の半分以上を過ごし、韓国の価値観が基準であるということが予想できる。彼ら両親にとっては一人で生計をたてられるとしても、バビのようにホテルの運転手になってもらうよりは、大学に進学してもらいたいと考えている。そして、ジスには医学部を出て、皆から尊敬され、安定している職業についてもらいたいと考えていた。これは実際の韓国社会においても、よくみられることであるといえる。韓国では大学の進学率が1993年において約55%であり、ホワイトカラーへの願望が高い。儒教的な思想から学歴の高い人を尊敬し、ブルーカラー的な仕事は敬遠されるという韓国社会に照らし合わせて考え、バビのようなホテルの運転手はある意味賤しい職業であり、恥ずべき職業と彼らが感じていると考えられていることがわかる。映画の中で結婚式において両家が会話している時、バビが大学に行っているのではなく運転手をしていると言ったことで場が気まずくなるが、嫁の母が助け舟を出す場面がある。「最近の若い人は進取的ですからね。独立心も強くて。職業に貴賤が無いのがアメリカじゃないですか。」（"요즘 젊은 사람들은 진취적이에요. 독립심도 강하고. 직업에 귀천이 없는게 미국이잖아요".）韓国直輸入である彼らの価値観からは、ジスやバビの不安定な生き方は到底認められるものではなかった。

長男であるフランクは、怒りが抑えられない父親と母親にかわり、ジスを説得しようとする。彼は父親や母親ほどジスに対して反対するわけではなかったが、彼女に現実を淡々と説く。有色人種には見えない天井があり、ジスがどんなに頑張ったとしても成功することはできないことを、彼女にわからせようとする。しかしながら、ある程度落ち着いた態度であり、家族でありながらも別の人間であるという距離感が垣間見える。このことは、彼の妻がキム一家のマーケットの会計を手伝っていたけれども、もう無給で働くことはできないと言い出したこと、ロス暴動の時に、ジスが電話しても居留守を使って助けに行かなかったことにも見出せる。これには、彼がアメリカへ渡ってきた時期が関係していると思われる。ジスが8歳でアメリカに渡ってきたことから、少し歳の離れている彼は、ある程度成長し、物心がついてからロサンゼルスにきた。彼の父親と母親寄りの考え方の原因は、若い時は韓国文化の中で生きていたことにある。しかしながら、彼は両親と違って現地の学校に通い、英語を操るようになり、実際のアメリカ社会を体験するようになる。そこで経験したことは、ジスに向かって説いたアジア系の見えない壁であったのではないだろうか。アメリカの中とはいえ、商店の中で、他のアメリカ人とあまり積極的に関係を持たなくても何とか暮らしていける両親達と違って、彼は韓国社会とアメリカ社

会のはざまにあって、一番現実的に葛藤を体験したのかもしれない。このような立場から、彼はジスが人生の方向転換をすることに反対することになったと考えられる。

ジスが俳優の勉強を選んだ理由は、自分自身がやりたいことをやるべきであるという考え方からであった。彼女は小さい頃から現地の学校に通い、英語を覚えると同時に、アメリカの文化を自然と身につけてきた。このことは勘当されて家を出た後の生活の仕方に描写されている。例えば、ファッショナブルな服装するようになったことや、バーで友人と酒を楽しむことが普通となったことなどの表面的なことから、兄フランクが韓国人の妻を迎えたのと対照的に白人であっても恋人にしたり、黒人であってもお互いに愛し合ったりということまで、彼女は当たり前としてアメリカ社会を受け入れる。「お前の考え方は不毛だ。私たちはアメリカにすんでいるんだぞ。」（"니 생각은 너무 무모해. 우린 지금 미국에 살고 있고".）このようにフランクに諭され、ジスはこう答える。「そうだよ、私はアメリカ人だよ。私は韓国人達が、みんな自分の子供を医者や科学者に育てたいと聞くのが嫌よ。私は自分自身がやりたい仕事をしながら生きていきたいの。私の能力でアジアン・アメリカンという壁を飛び越えたいのよ。」（"그래, 난 미국 사람이야. 난 한국 사람들이 모두 자기 자식을 의사나 과학자로 키울라고 드는게 싫어. 난 내가 하고 싶은 일을 하면서 살고 싶어요. 내 능력으로 아시안 아메리칸이라는 벽을 난 뛰어넘고 싶다구요.）これらのことからわかるように、ジスは自分自身をアジアン・アメリカンと認識している。しかしながら、自分自身を「アメリカ人」と言っているように、「アジアン」という枠の中であると他者に決めつけられることには、大きな抵抗を感じている。幼い頃からアメリカ社会に馴染み、同化しているということがわかる。このように、同じ家族であっても移民という出来事によって価値観が大きくかわっていくことが読み取れる。

この３人の違いは、実際にアメリカへ渡って行った１世、そして幼い頃に渡り、アメリカで育った1.5世、もしくは現地で生まれた２世の価値観の違いを表現しているといえる。両親のような移民１世世代の儒教社会韓国の考え方と、バビやジスに代表される1.5世、もしくは２世のアメリカの文化で暮らしてきた人々の考え方とのせめぎあいが、この映画の家族会議から読み取れるのではないだろうか。

また、第二の特徴は、ジスが体験した学校生活に見られる、韓国人と白人との関係である。ジスの通っていたドラマスクールには、アジアから来た人間は他にいなかった。そして、アジアだけでなく、有色人種と見られる人達もおら

ず、白人と呼ばれる生徒たちだけで構成されていた。ジスはこの学校の生徒たちに受け入れられて交流を持ち、人種が違うにもかかわらずスティーブと恋愛をするようになる。なんの問題も無いように見えた。しかしながら、スティーブの裏切りによって、彼女の「アジアン」という立場が明らかになる。彼女は前向きで精力的な性格であったことから、アジア系であるからといって極端に疎外されることはなかった。しかし、スティーブや友人達はある意味物珍しさから付き合っていたということが、事件の後の彼らの態度から読み取れる。「結局親を捨てたどこから来たかわからないアジア系が映画を作ったと言うよりも、自分自身が映画を作ったと言ったほうがいい」ということが、スティーブにとって「常識」であったことは、彼の悪びれない態度に映し出されている。また、クラスメート達も落ち込み自暴自棄になるジスに対して、種類が「違う」人間であることからどう対処していいかわからない。やはり、彼らにとってジスは異質な者であったということがうかがえる。第一の特徴でみたことから考えて、ジスは自分自身をアジアン・アメリカンであると考えながらも、「アメリカン」になりたいと思っている。そしてそれはある程度白人としてのアメリカ人を意味していると思われる。何故かというと、フィルムで成功できるのは白人であるという前提があり、彼女はそれを成し遂げたいし、またできると考え、勘当されてでもドラマスクールに通っていたことから言える。しかしながら、彼女が体験したことは、アジアン・アメリカンはあくまで「アジアン」であるという、厳しい現実の壁であった。第2章の冒頭で述べたが、アメリカへ渡っていった移民たちは、大半は底辺の労働職やサービス職への就職を余儀なくされていた。映画のジスの例に関しては極端ではあるものの、ある程度の見えない制限があったことは事実である。平等には程遠い現実に、組み込まれていった彼らの苦悩を体現しているといえる。

第三の特徴として、ロス暴動を中心とした韓国人と黒人の関係が描かれている点があげられる。実際のロス暴動を通して考えていきたい。[6] ロス暴動は白人中心の社会への抗議であったにもかかわらず、どうしてコリアタウンが大きな被害をこうむったのだろうか。コリアタウンの被害の要因として、白人地域と黒人地域の中間、ヒスパニックの居住地域と重なっているという位置関係が挙げられる。警察など行政の対応の遅れも、大きな原因であった。[7] そして、もうひとつの原因として挙げられるのが、マスコミの報道姿勢である。韓国人と黒人の間のトラブルや葛藤を積極的に取り上げ、暴動中でも一年前に起きた、在米韓国人商店主のトゥ・スンジャがナターシャ・ハリンスという黒人女性を

銃で撃った事件を流していた。マスコミの報道姿勢は、暴動の真実を映し出すというよりは、韓国人と黒人の表面的な対立を大きく取り上げるにとどまり、コリアタウンに対しての暴力を助長する結果となった。

映画の中でもこの時の様子が描かれている。店の中でテレビを見ていたジスとバビの間に交わされた会話からは、当時の韓国人達のメディアに対する不信感を読み取ることができる。[8]

바비： 젠장! 왜 저걸 지금 보여주는 거야? 저거 보고 백인이 아니라 우리 한인들을 공격하라는 거야, 뭐야?

지수： 이건 편파보도야. 성난 흑인들이 한인 상점들을 집중적으로 공격하고 있다? 이건 마치 이번 폭동이 한흑 갈등 때문에 일어난 것처럼 보도하고 있잖아.

바비： 개새끼들! 미국 언론들이 우릴 희생양으로 만들고 있어.

バビ： くそ、どうしてそれ（ナターシャの事件）を今見せるんだ？これを見て、白人達ではなく俺たち韓国人達を攻撃しろっていうことか？

ジス： これは偏った報道だわ。怒った黒人たちが韓国人商店を集中的に攻撃しているって？これはまるで今回の暴動が、韓黒葛藤のために起こったことみたいに報道しているじゃない。

バビ： ばか野郎どもめ！アメリカの言論は俺たちをスケープゴートに仕立てている。

このように、マスコミに取り上げられていた韓黒葛藤とは、どのようなものであったのだろうか。韓国人が多く住むようになった結果、街では黒人たちと日常の接触から衝突することが多くなっていた。黒人側は、韓国人達が黒人に対して敬意を払わずに見下すような態度をとっていることに不満を感じ、黒人客は全員盗みをするものと決めつけているのではないかという不信感を持っている。また、商店経営をする上で黒人を雇用しようとしない姿勢や、韓国人が短期間に高い稼ぎを出しているにもかかわらず、黒人社会に還元をしていないのではないかという不満が出されている。

映画の中にいくつか韓黒葛藤に関係する場面がある。例えば、ジスの母が客にお釣りを渡す時に手に直接渡さずにカウンターに置く場面があるが、客との

やりとりが以下のように起こる。

Mother：　Here we go.
Customer：You don't see my hand ?
Mother：　Oh, yes. I'm sorry.
Customer：You don't want to touch my skin, ha. Think you gonna get some disease ? You mother fucking Korean make me sick.

この会話では、黒人客が店番をしている母にだけ怒りを向けているのではなく、韓国人全体に対して嫌悪感を持っていることが表現されている。

この黒人達の抗議に対して韓国人側は、黒人による犯罪が多発しているのは事実であるということ、お釣りを手渡さないのは文化的なものであること、黒人と韓国人は仕事に対する考え方が違うこと、短期間に利益をあげるのは一日14～15時間年中無休で働くからであるという反論をしている。ロス暴動以前から、韓国人商店不買運動が展開されるなど、韓黒関係は悪化していた。

メディアによる韓黒葛藤は過剰なものであったが、このようなお互いの相互理解の欠如が被害の要因ともなったことは、実際にロス暴動中に起こった、次のようなことからわかる。酒屋を営むある韓国人男性は、３人の黒人を交代で６年間雇っているが、暴動時には従業員と近所の人に守られ、店は被害を受けることなく助かった。その一方で、おなじく酒屋を営む韓国人夫婦の夫人は、普段利用者の顔をまともに見ずに、つり銭は手に返却していなかった。暴動の際、この韓国人夫婦の店は完全に破壊されたということだった。[9] また、ある黒人の青年は「韓国人が経営するリカーストアがあって、黒人の客を無視する態度が感じられた。主人は黒人を一人も使いはしなかった。そのため彼の店は真っ先に襲われ、同じ敷地内にあったクリーニング店まで一緒に焼かれてしまったんだ」と語る。[10] これらの例からわかることは、韓国人の店であっても地域の黒人社会に密接に関わりながら、黒人達に積極的に受け入れられるような商店は守られて助かり、逆に地域との文化的な交流が少なく、地域の人々に誤解されるような距離であった商店はターゲットになったという点である。このことから、アメリカ社会の中の人種差別に対する不満が一番の原因であったものの、韓黒相互理解の欠落もロス暴動での韓国人の被害を大きくした原因であるということが読み取れる。

しかしながら、黒人側だけが韓国移民の文化を理解しようとする努力をしな

かったのだろうか。映画に戻り、在米韓国人たちの黒人に対する意識をみていきたいと思う。ジスが幼い頃アメリカの小学校に通っていた時、在米韓国人のクラスメート達とこのような会話が繰り広げられる場面がある。

Classmate 1： My mom and dad told me your parents like black people.
Marian： Yes. I live with black neighborhood.
Classmate 2： My mother told that if you touch black people or they touch you, you turn black, too.
Classmate 1： You touch black people ?
Classmate 1&2： Oh, gross me out!
Classmate 2： Marian, I'm sorry for you.

彼女達は、自分達の体験から黒人に対して嫌悪感を抱くようになったわけではない。1.5世、もしくは2世の彼女達の会話を通して、両親達が黒人達に対して偏見を抱いていることが読み取れる。そしてそれが一部の人間だけではなく、程度の差こそあれ多くの在米韓国人の考えであることも予想できる。

ジスの父は訛りがあるものの、ある程度の英語力を持つ。マーケットで従業員として働きながら、その後自分で店を継ぐという経緯からわかるように、彼はある程度アメリカ社会との接点をもち、知識を得ている。そしてこのことから黒人であるルイスと、共に働き、共に店を守るというお互いを信頼しあう友人となる。ジスの両親と同じように、アメリカでの韓国人は1世の人間がほとんどを占める。彼のような積極的に地域社会に参加し、信頼を得ることができる韓国人がいる一方、フランクの結婚相手の両親との会話に見られるように、韓国と全く変わらない生活を送る人々もいる。ジスの家族の特徴のところで述べたが、1世である彼らの文化的背景は韓国にある。韓国語の新聞を読み、アメリカの政治よりも韓国の政治に関心をもち、仕事に忙しくアメリカ文化を勉強する余裕が無い。語学や文化の壁から、同じ在米韓国人との付き合いのみにとどまることから、このような黒人に対する無知と偏見を、ディープ・ブルー・ナイトの時代以前の韓国から持ち込んで持続させていると考えられる。そしてそれは子供に対する教育に反映されていることがうかがえる。黒人との関係には、このような背景が読み取れるのではないだろうか。

これらの3つの特徴を通して、70年代と80年代に、韓国から移民していった者達の苦悩を読み取ることができる。つまり、キム一家に見られる世代の価値

観の相違、ジスと白人達との関係に代表される白人社会との価値観の相違、ロス暴動時に焦点が当てられた黒人達との価値観の相違である。韓国における「アメリカ」のイメージをそのまま持ち込み、無意識に自分達を白人社会の一員であるとみなし、アメリカ社会の現実問題に目を向けてこなかったことは、彼ら自身を苦境に陥れることになった。そして、ロス暴動に巻き込まれることによって、移民していった人々のアメリカン・ドリームだけでなく、白人中心であるアメリカ社会に対する幻想も崩れることになった。この事件の後、黒人達をはじめとする他のマイノリティ・グループと連携をとることの重要性が在米韓国人達の間で認識され、今後どのようにアメリカ社会と共存していくかということが模索され始めた。ディープ・ブルー・ナイトにおいて取り上げた自由移民達は、「アメリカ」への理想と現実との間で葛藤し、アメリカ社会において自分たちは何者であるのかという問題に直面したといえる。

第3章　『ラブ』における移民のもうひとつの姿

第1章と第2章では、アメリカに自らの意思で移民していった人々を描いた作品を扱った。第3章ではそのような人たちと対照的に、自分の意思と関係なく韓国を出て行った国際養子についてみていきたい。韓国で2000年に製作された『ラブ』（이장수, 러브 2000）という映画は、アメリカに国際養子として渡っていった者達を描いた作品である。この作品を通して、韓国からの移民の今までとは違う一面を見ていきたいと思う。以下はラブのあらすじである。

マラソンランナーであるミョンスは、韓国代表団の一員として、ロスマラソンに備えた現地トレーニングに参加するために、アメリカに到着する。アメリカの砂漠の中や、曲がりくねった道、アップダウンの激しい坂道などの過酷な練習が行われていたが、ある晩ミョンスは荷物を担いで親友ギョンチョルが止めるのも聞かずに合宿から抜け出してしまう。彼は前回アジア大会で、35キロ地点において棄権してしまっていた。このことからスランプに陥り、苦悩の末マラソンをやめようと考えたのだった。韓国にも帰ることができず行く当てのない彼は、アメリカに国際養子として引き取られた又従兄弟のブラッドに連絡を取ることにする。そしてしばらくブラッドのロサンゼルスの家に居候することになった。

又従兄弟のブラッドは、クリーニング店を営んでいた。明るくて愛想のいい

彼のクリーニング店は、在米韓国人達は勿論、地域の様々な顧客から信頼され繁盛している。2階建ての自宅の1階で店を構え、韓国人に限らず従業員を雇いながら、色々な言語を操ってうまく切り盛りしている。また、クリーニング店を営むかたわら、在米韓国養子達の集まりに積極的に参加したり、彼らの韓国における両親探しを請け負っていたりもした。仕事の合間に暇があれば、色々なところに電話をかけて情報を手に入れようとする生活を送る。

そしてそんなブラッドと一緒に暮らしているのが、同じく韓国人養子であるジェニーだった。彼女は養父母と別れてからブラッドと共に暮らしており、彼の店で縫製や洗濯の仕事を手伝いながら日々を過ごしている。韓国のトロットが大好きな女の子で、毎朝植木鉢に水をやりながら、韓国にいるはずの母親に会える日を夢見て暮らしている。[11] 彼女は誰に対しても心を開かず、彼女の愛情を受けることができるのは、韓国の土が詰まった植木鉢の苗だけであった。

ミョンスが居候するようになってしばらくは、ジェニーは口も聞かないうえに表情も無く、まるで彼がいないかのように振舞った。韓国のトロットをかけながら部屋の掃除をする時には、彼がソファに座っているにもかかわらず、ソファの下のカーペットをはがして雑巾がけをしようとしたり、スーパーマーケットでは彼が籠に入れたものを無言で全部出して自分で選びなおしたり、英語の全くわからないミョンスをスーパーのレジで一人にしたりと、まったく彼の存在を認知しようとしなかった。

ミョンスはクリーニング店を手伝うようになっていたが、ある時仕事中にブラッドに見守られてジェニーが韓国に電話をしているところを見る。「ええ、私がジェニーです。私が4歳の時に平和院に引き取られました。それで、左側の背中にほくろがひとつあって、右側のひざに傷跡があります。それと私の足の指なんですが、人差し指と中指の長さが同じなんです。普通の人は人差し指が長いじゃないですか。でも私は同じなんです。」しかし電話の相手は彼女の本当の母親ではなく、彼女は電話を切ってからしばらく屋上に上がって一人で時を過ごす。その日の夜、ミョンスがふと目覚めるとバスルームから泣き声がもれていた。ジェニーは苦しくて切なくなるほど、強烈に泣いていたのだった。しかしバスルームを出た時、心配するミョンスとは言葉を交わすこともなく、ジェニーはまた無表情のまま自分の部屋に戻って行ってしまう。

ブラッドの家に来てから幾日かたつと、友人のギョンチョルが彼の居所を突き止めて訪ねてくる。彼はブラッドと二人で酒を飲み、ミョンスとの思い出をブラッドとジェニーに話し、ミョンスに悪態をつき始める。ミョンスはギョン

チョルをジェニーが運転する車で送るが、途中で前回のアジア大会での棄権について口論になり、ギョンチョルの「マラソンで勝負をつけよう」という誘いにのって夜のロサンゼルスを全力疾走する。結局途中の交差点にて車とぶつかりそうになって中断することになるが、ギョンチョルの怒りは収まらない。彼は中学校の時からミョンスの背中を見て走ってきたこと、ミョンスが金メダルを手に入れた時に彼は銅メダルであったこと、一歩だけでいいからミョンスより速く走りたいと思っていることから、ミョンスがマラソンから逃げ出すことに耐えられないということを伝える。また、今度の大会において金メダルをとって両親を貧困から救い出すためには、ミョンスの力が必要だった。しかしミョンスは彼と共に合宿には戻らず、ジェニーの車で家に帰る。

時が経ち、ジェニーはミョンスに対して段々と心を開くようになる。独立記念日パーティに向かう途中に車が止まってしまったハプニング、車の中でブラッドと3人で大声で韓国の歌を合唱した思い出、養子達の集まりでの出来事、スーパーの帰りにまた車が止まったハプニングなど、数々の日常で起こった出来事を通じて、彼女はミョンスの純粋さとやさしさに惹かれていく。そして二人で会話を交わすようになって、彼女の顔に笑顔が出るようになった頃のある日、ブラッドが見つけ出してくれた韓国にいる母親らしき人に、また電話をかけることになる。「ええ、私がジェニーです。私が4歳の時に平和院に引き取られました。それで、左側の背中にほくろがひとつあって……ええ、そうです、右ひざに傷があります……ええ、黄色いスカート持っています……。」彼女はついに本当の母親を見つけることができたのだった。しかしながら彼女の母親は現在再婚していて3人の子供がいるということ、彼らはジェニーのことを知らないということ、ジェニーのことは申し訳ないと思っているが会うことはできないということを告げられる。彼女はまた屋上に上がり、夜暗くなるまでそこで一人時を過ごす。そして、どんなことがあっても水をやることを忘れなかった植木鉢を床に落として割る。彼女の苦しみがよくわかるブラッドは、それを見つけて泣きながら土を集めようとする。ミョンスは新しい植木鉢を用意して、丁寧に植え直してキスとともに彼女に手渡した。

これを機に、ミョンスとジェニーの想いは深まっていくが、ある日ブラッドが3泊4日の旅行に出発したことから、二人の仲はさらに親密になっていく。この時ミョンスは35キロの恐怖を克服しようとマラソンの練習を決意し、ジェニーは昼間毎日自転車でサポートすることになった。そして夜は、ブラッドに強制的にモーテルにミョンスが隔離されていたことから、長電話を楽しむ日が

続いた。ついに3日目の夜に我慢できなくなったミョンスが家に会いに行き、共に寝ることなる。しかし4日目の朝、翌日に帰ってくるはずだったブラッドが急遽旅行から帰ってくることによって、2人の関係が発覚してしまう。ミョンスのTシャツを着ているジェニー、ジーパンをあわててはこうとしているミョンスを見て、ブラッドは怒りと落胆の複雑な感情から激昂するが、おさまった後にやがて今回の旅についてぽつりぽつりと語りだす。韓国に行ってジェニーの母親に会ってきたということ、とてもやさしくて美しい方だったということ、しかしながら韓国人達は韓国人養子達を理解することは無理であると感じたことを告げる。彼はジェニーのことを想って、そのためだけに韓国に行ったのだった。母の写真の上にジェニーは涙を落とす。そしてミョンスはギョンチョルの待つ代表団の合宿に戻っていく。

時が経ってロスマラソン当日、ミョンスとギョンチョルは握手を交わし、全力を尽くすことを誓ってスタートラインにつき、そしてついにスタートが切られる。その頃、ジェニーはいつも通り裁縫の仕事をしていた。ブラッドに呼ばれ2階にあがると、なんと植木鉢の花が咲いていた。彼女はこれはムグンファかとブラッドに聞くが、ブラッドは答えることができなかった。[12] おもむろにブラッドは、今までの生活においてジェニーの世話をすることが彼の生きがいであったことを告白し、悲しさに目に涙を浮かべながらも、ミョンスのところへ行きたい時に行きなさいと彼女に言い聞かせる。その頃2人は世界中から集まった大勢の強豪達の中をトップ集団で前半を走り、20キロ地点からスピードアップしてトップに躍り出る。大勢の観客が見守るなか、順調にレースを展開していった。そして問題の35キロ地点に近づくにつれて、ミョンスはスランプが再発しそうな予感を持ち始める。それに抗いながら走りつづけようとするが、段々と不安が高まっていく。しかし35キロ地点直前にて、自転車に乗ったジェニーを発見、彼女の応援を受けてついに35キロを突破する。ペースダウンしてきたギョンチョルを助け励ましながら、2人はついにトップでゴールテープにたどり着く。ゴールライン寸前でミョンスは足をぴたりと止める。そして一歩先に出たギョンチョルはゴールラインを踏む。その後、他の選手に押されるようにしてミョンスもゴールする。彼はついに完走することができたのだ。レース後、彼はジェニーの運転する車の中で彼女の肩に頭を寄せ、幸せそうに眠る。

最後に、店の外で一人座っていたブラッドのもとに、養父母の家から家出をしてきた女の子が韓国の両親を探してくれと訪ねてくる。ブラッドは持ち前のやさしさから女の子を追い返すことができず、片言の韓国語しか話せない偶然

にもジェニーという名前を持つ彼女に、ユッケジャンを共に食べようかと誘う。２人が部屋に入っていく場面で映画が終わる。

この映画の主人公はミョンスであるが、今回はジェニーとブラッドのように、国際養子縁組によってアメリカに渡って行った養子達に焦点を当てていきたい。実は彼らのように幼い頃海外に渡っていく韓国人の孤児は、韓国が「孤児輸出国」と言われるほど多い。朝鮮戦争休戦後から現在まで約15万人の孤児が外国に送られ、最も海外へ養子を送った85年で約８千500人にものぼる。現在でも１年に2300～2400人余りの子供が、先進国である欧米諸国に向かって国際養子として海を渡っている状態である。そしてその渡り先は、アメリカが１位を占める。[13]

国際的に養子を送りだすことは、世界では第二次世界大戦以降に見られるようになった現象である。韓国でのきっかけは1950年に勃発した朝鮮戦争に求められる。朝鮮戦争による離散家族は1000万人にものぼるといわれ、多くの戦争孤児を生み出した。移民の第４期にあたる1950年から1964年までに、国際養子としてアメリカの永住権を獲得したものは5348人にのぼる。朝鮮戦争で国土が壊滅的な被害を受けていたうえに、南北分断という大きなひずみが誕生した当時の韓国政府や国民に、孤児を救済できるような余力は残っておらず、外国からの救援としての国際的な養子縁組が積極的に推進された。

この孤児の国際養子は朝鮮戦争の副産物だったが、実は戦後40年経ってもまだ続いているのが現実である。国際養子の最大の受け入れ国であるアメリカの国務省が2000年に発表した「海外孤児養子移民ビザ発給統計」によれば、1989年から98年の10年間にアメリカ入りした世界11カ国８万5293人の国際養子のうち、韓国人は第１位の２万833人にのぼり、全体の約25％を占めている。86年には、過去最高の6138人がアメリカへと渡っていった。２位は中国の6780人、３位はロシアの5900人である。そして2002年の統計によると、中国6062人、ロシア4904人、グアテマラ2361人に続き、韓国は第四位である1713人を養子として送り出した。巻末の表１に、1997年から2002年までの間アメリカで養子縁組された養子達の数を、主要な出身国別に７年間分まとめた。この表から、他のアジア諸国と比較してみても、中国に続き第２位で、韓国は際立っていることがわかる。依然として現在でもアメリカへ国際養子を多く出している現状がうかがえる。

アメリカでは様々な国から、年間２万人近くを国際養子として受け入れてい

る。[14] このように国際養子が多く求められる背景には、国内における養子の数が、需要に比べて少ないということがあげられる。近年アメリカでは女性の晩婚化が進んだことによって出産の機会を逃した人々、一度出産を断念したあとで子供を望むようになった家庭などが増えてきた。出産率の低下や妊娠中絶の増加ということからも、子供の絶対数が減ってきている。その上、アメリカでは、養子希望者が多いことから、申請してから養子を実際にもらう期間までが2年から3年と長い。また、年齢や結婚歴、人種など、斡旋すべき家庭の優先度が決まっている場合も多い。高齢であったり、離婚して間もなかったりすると、順番を後回しにされるなど条件は厳しく、実際斡旋してもらえない場合もある。このような状況のもとで、国際養子縁組は一般的には簡単に、しかも早く、養子を手に入れられる方法として受け止められている。

また、養子として人気があるのは、生まれたばかりの健康な白人の幼児である。アメリカでは養子として出される子供は、母体が麻薬に冒された状態から生まれたドラッグベビーである可能性が高い。また、エイズにかかっている可能性もある。国際養子縁組が盛んなカリフォルニア州においても、麻薬に侵された母親から毎年、数百人単位でドラッグベビーが生まれている。黒人やヒスパニック系の子供であるなら、養子としてすぐに引き取れるほど多いが、アメリカ国内のこれらの事情からあまり需要がない。このことから、健康で心配のない子供として、国際養子がもてはやされる一因となっている。

もう一つの原因は、実親との間の養育権の問題である。アメリカでは一度養子に出された子供でも、裁判の結果によっては実親に養育権が戻される場合がある。例えば、カリフォルニア州の法律では、6ヶ月以内なら実親は子供を取り戻せる場合もあるとしている。また、アイオワ州の実親とミシガン州の養父母が、養子として出された子供の養育権をめぐって争ったジェシカ裁判がある。父親として養子に出すことに同意した男性が、実は本当の父親ではなかったことが後に判明し、その後実の母親と結婚した実の父親が「自分には養育権がある」と主張したものだ。結局93年夏の判決で実親側が勝ち、誕生時に養子となったジェシカは2歳半になって、再び養父母から実親に戻されることになった。しかし国際養子となると、外国から実親が子供を取り返しにくる心配はほとんどない。このことも、国際養子は「安心」して迎えられる一因となっている。

韓国に限ったことではなく国際養子縁組は1960年後半以降急速に増加し、主にアジア、中南米諸国から、少子時代を迎えた米国、欧州など先進国への赤ちゃん流出が相次いだ。しかし法律が整備されておらず、国際的な条約も締結さ

れていない状態で、民間の斡旋団体が金銭目当てに介在するといったケースが目立ち、様々なトラブルが表面化してきた。一部では幼児売買や臓器移植のための献体、養父母の幼児虐待なども引き起こし、大きな社会問題に発展していった。そうした情勢の中で、国際養子縁組は「政府や当局の管理下で行われるべきだ」という論調が、次第に世界流れとなる。1986年12月の国連総会では国際養子縁組のあり方が問題になり、国際養子は「原則として権限ある当局が国内養子の場合と同様の保護条項及び基準を適用して行うべきだ」という決議が採択されている。1989年11月の「子供の権利条約」では、国際養子縁組について「二国間または多国間の取り決めの枠組みの中で権限のある当局等によって行われるべきである」としている。さらに、国際養子縁組は、子供が母国で養子縁組することができない場合の代替的手段としてのみ行われるべきだとしている。93年に開かれた国際司法会議では、「国際養子縁組に関する子の保護及び協力に関する条約」（ハーグ条約）が締結された。地理的、社会的、文化的な条件が異なる国の間で養子縁組が増え、国際的な法整備が必要であるとの認識からだ。[15] このような流れから、国際養子大国である韓国も、孤児の国際養子縁組に対して対策を取らざるを得なくなってきた。

国際養子は、国内外から批判的に受け止められている。70年代には、今よりも敵対関係がはっきりしていた北朝鮮から、「孤児を外国に売っている」という批判を受けるようになった。ソウルオリンピック前には、諸外国から「孤児輸出国」の批判を浴びることになる。そして国内においては、90年代に養子達の韓国における親探しが増加したため、養子に出された孤児たちが新聞の記事に取り上げられたり、映画の題材になるなどメディアに登場する機会も増えてきた。国際養子は、韓国の多くの人々が認知する問題となる。この内外の批判に向き合い、政府は1987年以降、毎年養子を３％ずつ減らす方針を取ってきた。そして1994年には、海外養子を毎年減らしていき、2015年までに完全に中断するとして、海外養子の数は2000人以内に制限されていた。国内での養子縁組を促進するために、国内で養子縁組みした家庭に対しては、「養子促進および手続きに関する特例法」によって中・高校の授業料と入学金が免除され、住宅資金が補助される。障害者の場合はさらに月10万ウォンの養育費と、無償医療などを施すなどの援助を与えている。その他にも人口増加対策も兼ねて、徹底した家族計画の推進も大々的に行った。しかしながら国際養子の数は、一時減ったものの、再び増える傾向にある。政府の試みはうまくいっていないという見方が強い。

1999年6月までの時点で、これまで海外の家庭に送られた国際養子は14万2301人なのに対し、国内養子は5万6963人である。国内に子供達の引き取り手がないことから国際養子に出さざるを得なかったという現状がある。朝鮮戦争の被害を乗り越え、韓国は近年目覚ましい経済的成長を遂げ、国際的にも力をつけてきた。NIESと呼ばれる中進国の段階、さらにはOECD加入に象徴される先進国の段階へとあがっていったように、経済的復興を遂げているにもかかわらず、国際養子がどうして減らないのか。どうしてジェニーのようにアメリカに渡る韓国の養子が未だに続いているのか。

一つ目は、韓国の血統を重んじる儒教社会に原因を求められる。例えば「異姓不養」という習慣は、同じ勢を名乗る一族の中からしか養子は取らないという意味で、そこには純血性へのこだわりが見られる。これは単なる習慣ではなく、80年代までは法律としても存在しており、父方の血族以外は後継ぎとなることはできなかった。家とは単なる機能ではなく、長い間引き継がれてきた「血の系譜」であり、個人のアイデンティティのベースとなるものである。この血筋へのこだわりから、一族の純血性を守るために外部の血は入れないという、血族集団としての家族の排他性というものが発生する。また、韓国の社会は父系の家系を重視する。例えば、父方の血の系譜を記録した族譜が韓国の家にはある。また、父親から受け継いだ姓を生涯変えることはなく、結婚しても夫婦は別姓である。民法に「子は父の姓及び本を継いで、父の家に入籍する」とあるように、子供達は必ず父親の姓を名のらなければならないため、家族の中では母親だけ姓が違う。このことから離婚した女性が子供を引き取った場合でも、子供はずっと夫の姓にあり、母親と同じ姓は名乗れないという現象が起きる。80年代までは母親が引き取り育て、父親が養育費なども払わないなどと全く関与しなかったとしても、母親に親権が認められず、父親の戸籍に子供は入ったままといった状態が生じていたこともあった。このことから、韓国で母親の戸籍に入り、母親と同じ姓を名乗れるのは、「父親が不明」、あるいは「認知しない」子供だけである。このような状態は韓国社会では認められにくく、差別の対象となりやすい。80年代では、養子全体の80%～90%がこのような未婚の母の子供となっており、現在国際養子の多くはそのような女性が産んだ子供といわれている。未婚の女性が子供を育てていくにあたって、困難が伴うような社会的慣習が残っていることが一つの原因だと思われる。

二つ目に、経済的な背景があると考えられる。韓国では1997年末、短期対外債務の急増によって、IMFへの緊急融資要請を余儀なくされる。そしてIMFの

構造調整プログラム受け入れ、緊縮財政を実施することになる。いわゆるIMF危機である。韓国ウォンの価値は対ドル交換比率において一挙にほぼ半減し、それを反映してドル建ての一人当たりの国民所得も３割以上減少する結果となった。[16] そして98年の経済成長率も前年比マイナス6.5%という経済的危機に直面した。もちろんこのような国家としての数字だけでなく、実生活の上で人々の経済的な基盤を根底から揺るがす問題であった。失業者をとってみても、1997年１月に55万人、1998年１月に93万人、1999年１月に176万人という数字が出てきている。さらに離婚の増加や、共働きによるライフスタイルの変化といった影響が現れている。1998年上半期に捨てられた子どもは一月平均で800人を越え計4876人であり、1997年の同期より約1500人増加となった。そして全国の保護施設内の子どもは１万７千人と集計されていた。家庭が苦しくなり、中絶費用が50万ウォン以上もかかることもあって、子どもを産む未婚女性が増えたからだと考えられる。このような経済的な影響も、子供が養子に出されるのを後押ししているといえる。

このことから、ジェニーのような近年になっても海外に送り出されている養子達と、戦後の混乱期に送り出されてきた養子達の理由は、全く異なっているということがわかる。

近年養子に出された子供達は、送り出された理由が今現在でも変わらないことから、やはり成人してからも韓国社会から疎外されることが多い。法的なものとしては在外同胞特例法が例としてあげられる。1999年８月に制定された在外同胞特例法は、経済のグローバル化が進む中、海外同胞にも内国人同様の権利を与えようという画期的なものだった。しかしながら審議の過程で在中・在露250万人が適応外になったことから、後日強い反対にあい廃止されてしまったが、この中には海外養子に対する権利も適応外とされていた。その他にも、18歳以下の養子には実親との再会を法律的に禁止している。

文化的にも国際養子に対する風当たりは強く、韓国児童を養子にした米国家庭が、韓国人たちの嫌がらせで苦労をするという話もある。アメリカ人の養父母が、養子となった子供に配慮し、韓国人の文化を教えようと韓国人社会に接近するが、むしろ韓国人達の偏見に、子供や養父母が共に傷つけられるという報告である。韓国から移民してきた１世達は、韓国の文化を強く保持しているために、養子というのは私生児であり親から捨てられた子だというレッテルを貼り、疎外するという状態が起こる。このため韓国から自分の意志で移民してきた韓国人たちとは、交流を持つことは少ない。

そしてそのような養子達の最大の問題は、アイデンティティの問題である。映画の中のジェニーが母親探しをするときに、自分を伝えるために何度も繰り返すセリフがある。

제니：　전데요, 제가 제니인데요. 저 4 살 때 평화원에 들어갔구요. 그리고 왼쪽 등뒤에 점이 하나 있고 오른쪽 무릎에 흉터가 있어요. 제 발가락이요 둘째랑 가운데랑 길이가 똑같아요. 보통사람들은 왜 가운데가 더 길잖아요. 근데 전 똑같아요.

ジェニー：ええ、私がジェニーです。私が4歳の時に平和院に入りました。それで、左側の背中にほくろがひとつあって、右側のひざに傷跡があります。それと私の足の指なんですが、人差し指と中指の長さが同じなんです。普通の人は人差し指が長いじゃないですか。でも私は同じなんです。

ジェニーにとって、自分自身が何者なのかということは、このフレーズに集約される。彼女は自分自身がどのような存在であるか、このフレーズと、母親が韓国にいるということ以外には知らない。自分自身のルーツは、この数行のセリフしかない。このアイデンティティの空白は、誰にも心を開かずに暮らしてきたこと、ミョンスと出会ってから時間がかなり経過するまで、まるで彼の存在を取り合わなかったことに見られるように、ジェニーの精神に大きく影響していることが見て取れる。そして電話を通して、実の母親から彼女に今帰ってきてもらっても困るという、事実上強く求めていた実親から存在を否定されたともとれる言葉を聞いたとき、彼女の生きる目標が揺らぐ。自分自身が何者であるのかという問いの答えを求める為に日々を過ごしていた彼女は、その最後の砦を失ってしまうのである。

ジェニーが体験したことは映画の中にとどまらず、現代の韓国社会における国際養子の立場と苦しみを代表しているのではないだろうか。彼らは自分自身のルーツを知らないことから悩み、答えを韓国に求めようとするが、韓国社会は変わることなく養子に対して厳しい見方をする。ラブはそのような韓国社会と養子達の葛藤、その問題を描き出しているといえる。韓国の急速な経済成長、国家としての成長は、社会福祉の部分を軽んずるという弊害をもたらした。送り出す側の論理を主張してきた韓国社会に対して、養子として送られていく子供達の視点を提示したことに大きな意義があるといえるだろう。

結び

第１章では、アメリカへの移民の歴史と、70年代と80年代に移民が急増してきた社会的背景、アメリカとの複雑な関係から生まれたアメリカ観との関連を、ディープ・ブルー・ナイトを通してみてきた。70年代から80年代にかけて、独裁政権により海外からの情報をほとんど遮断され、意図的に操作された状態の中、人々は伝え聞いた異国の地での成功を信じ、よりよい生活を求めてアメリカに行くことを夢見みて、移民していった。そして移民という現象を通して、アメリカとの関係を深めていかざるを得なかった歴史的経緯と、アメリカ観の決定的な変化をみることができた。

第２章では、70年代と80年代に渡って行った移民の大部分が、アメリカでどのような生活を送っていたのか、また彼らの多くがどのような問題に直面したのかということをみてきた。ロス暴動や雇用の問題等を通して、彼らは韓国人である以前に、アメリカ社会という観点から見るとマイノリティであることを自覚しなければならないということがわかった。多人種国家であるアメリカにおいて、黒人や白人、他のマイノリティとの関係に試行錯誤し、これから先アメリカ社会にどのように適応していくかを考えなければならない状況が浮かび上がった。また、移民コミュニティの内部においても、世代によって大きく価値観の相違が見られ、葛藤が多く生まれている現状を知ることが出来た。

そして第３章では、国際養子としてアメリカに送られていったジェニーを描いた映画ラブを通して、アメリカへ渡っていった移民の中でも、自由移民とは違った一面をもつ移民があるということを明らかにすることができたと思う。彼らの存在を通して、海外へ子供を養子として送り出さざるを得ない厳しい近年の韓国経済事情、儒教的思想を根底に持つ韓国社会の文化、現在の韓国における福祉制度の問題点を浮かび上がらせることが出来た。

最後に、これまで扱った３つの映画を時系列において比較していきたい。これらの３本の作品を並べ比較したときに浮かび上がってくる特徴とは、それぞれの映画の中に描かれている移民達の姿、イメージの変化である。

ディープ・ブルー・ナイトとウェスタン・アベニューの２つは約10年の間隔をもって製作されたものであるが、ディープ・ブルー・ナイトに描かれている登場人物は極端でステレオタイプ的な性格であり、観客に感情移入を誘うような人物描写や構成にはなっていない。欲に駆られてアメリカを目指したという

ホビンのような人物が破滅するのは当然であり、金銭に重きを置き、男女関係にややルーズであるジェーンのような生き方は結局幸福にはならないという、一種の教訓めいたものさえ感じさせる。常に一段高い視点から描かれ、距離を置いた映像のとり方がなされている。また、映画の中に描かれているアメリカは極端に単純化されている点も特徴であるといえる。冒頭のディープ・パープルのバックミュージックに、広大なデスバレーの砂漠を、大きなアメリカ産の自動車に乗ってホビンがやってくるシーンや、移民局の職員にアメリカへの忠誠を訴えながらアメリカ国家を歌いだすことによってピンチを切り抜けるシーンなど、過去の日本と同じように、アメリカに対して抱かれていたある種の偏見、ステレオタイプが垣間見えることは否定できない。

一方1994年に製作されたウェスタン・アベニューは、ジスの人生を通して在米韓国人の生き方や悩みがある程度再現され、彼らの喜びや悲しみを織り交ぜながら人物が人間的に描写されている。ロス暴動という題材の中で、アメリカのコリアタウンでは黒人達との葛藤があり、同じ黒人であってもノーマンやルイスのような考え方の人々がいて、韓国人であってもジスやバビのような人もいるということが描かれている。また、在米韓国人が白人社会に完全には受け入れられていない現状があり、マイノリティの一部として見えない壁があるということも表現されている。映画の製作技術の差を考慮に入れたとしても、ウェスタン・アベニューの方が、アメリカ社会の現実と、アメリカに渡って行った韓国人をより正確に、深く捉えていたといえる。

そして第3章で取り上げた2000年に製作されたラブにおいては、「アメリカ」という舞台をとかく強調するわけでもなく、他の韓国映画と同じような雰囲気を醸し出している。映画の中の在米韓国人達は韓半島の韓国人とかわらず人間的であるし、明るいコメディ的なタッチで描かれ好感が持てる人物となっていた。ジェニーは国際養子という韓国社会ではある種のタブー視される存在でありながら、喜怒哀楽があり、普通の女の子と同じように恋愛に打ち込み、悩みながらも自分なりに前向きに生きていくという、自然な姿で描かれている。ウェスタン・アベニューでは、随所に在米韓国人の「典型的」な姿や、彼らはこのように暮らしているというある種の決めつけに近いぐらいの設定と物語の進行が目立つ一方、2000年に製作されたラブは、彼らの個々人としての生き方と個性に焦点が当てられている点に、違いを求めることができる。

このように3つの映画の中に描かれている在米韓国人の姿を比較してみると、本国における韓国人の、アメリカに対する理解が深まっていくことが読み

取れる。80年代にディープ・ブルー・ナイトが大ヒットしたのは、あらすじがサスペンス調でスリルがあっただけでなく、映画の中に描かれているアメリカのイメージがある程度観客のそれと一致したことからであったからと考えられる。1985年当時は、自由への期待が高まっていた時期にあり、観念的なアメリカ観を持ちつつも、アメリカに対する客観的な視点からの再評価が徐々に始まってきているという時代背景は先に述べたとおりである。90年代にウェスタン・アベニューが作られた頃は、ロス暴動が起こって韓国社会においても在米韓国人という存在に注目が集まり、彼らがどのような暮らしをしているのかということが本格的に研究され始めた時期であった。また、独裁的な支配から民主的な政治への過渡期であると同時に、アメリカという国に対する理解が深まり、客観的な視点を得ることができるようになってきた時期であった。1990年代後半、様々な局面におけるグローバル化の波の中で、海外の同胞とも連体して乗り切り、更なる発展を目指そうという流れが生まれてきた。アメリカと韓国の両国における在米韓国人たちの活躍も目立つようになり、彼らの存在は朝鮮半島の韓国に近づき、影響力も決して小さいものではなくなってきた。そして現在、国際養子が普通の生活を送る人間として描かれるほどに、韓国内の人々は、海外への理解を深めるようになってきている。この3つの映画からは、このように韓国が歩んできた近代の民主化、国際化の流れが見て取れるといえるだろう。

アメリカへ移民として渡っていった人々は、決して韓国の「周縁」ではない。彼らは文化的にも数字の上でも、無視することが出来ない存在である。むしろ、ここまでみてきた通り、アメリカへの移民達の姿と現代の「韓国」の姿は、表裏一体の関係にあり、切っても切り離せないものである。第二次世界大戦、朝鮮戦争という大きな災禍を経験しながらも、目覚しい発展を遂げながら前進してきた韓国社会において、移民という存在は大きく注目されるものではなかった。しかしながら住み慣れた国を離れ、異国の地へと移り住んだ人々に注目することによって、むしろ当時の韓国の文化、制度を見て取ることが出来る。なぜならば、彼らが祖国を後にしなければならなかったということそれ自体が、当時の韓国が文化的・制度的な大きなひずみを抱えていたということの証明であるからである。

何故移民という現象が起きたのか、そして何故移民は現在においても続いているのかということを真正面から受け止め、これまで韓国国内において注目されてこなかった、あるいは切り捨てられてきた分野についても、更なる向上と

発展がみられるよう期待するばかりである。

表1　米国に国際養子として渡っていった幼児の主な出身国

Region and Country of Birth	2002	2001	2000	1999	1998	1997
All countries	**21100**	**19087**	**18120**	**16037**	**14867**	**12596**
Europe	**7796**	**7637**	**6911**	**6159**	**5457**	**4916**
Belarus	163	129	41	23	–	–
Bulgaria	261	288	207	213	147	137
Kazakhstan	801	664	392	108	54	–
Poland	102	89	81	97	70	60
Romania	169	781	1103	887	388	558
Russia	4904	4210	4210	4250	4320	3626
Ukraine	1093	1227	645	307	168	65
Asia	**9721**	**8642**	**8639**	**7816**	**7393**	**5901**
Cambodia	275	384	368	238	241	64
China, People s Republic	6062	4629	4943	4009	3988	3295
India	459	540	491	486	462	311
Japan	41	38	35	37	35	42
Korea	1713	1863	1711	1956	1705	1506
Philippines	208	220	176	185	189	155
Vietnam	736	730	709	704	576	369
Africa	**337**	**343**	**217**	**200**	**171**	**136**
Ethiopia	102	160	103	100	88	51
Oceania	**22**	**19**	**6**	**6**	**3**	**3**
North America	**2750**	**2015**	**1890**	**1387**	**1344**	**1139**
Canada	6	2	0	2	0	0
Mexico	71	105	115	145	170	142
Caribbean	**269**	**266**	**205**	**179**	**170**	**186**
Haiti	192	187	136	93	113	130
Central America	**2404**	**1642**	**1570**	**1061**	**1004**	**808**
Guatemala	2361	1601	1504	987	938	725
South America	**466**	**429**	**452**	**459**	**497**	**501**
Colombia	329	261	246	226	221	212
Unknown or not reported	8	2	5	10	2	12

U.S. Citizenship and Immigration Services,「Table. Immigrant-Orphans Adopted by U.S. Citizens by Gender, Age, Region and Country of Birth Fiscal Year」『Yearbook of Immigration Statistics.』1997-2002

註

1　朴三石『海外コリアン：パワーの源泉に迫る』P37による。

2　法務省『平成12年国勢調査』「国籍、男女別外国人数」による。正確には「韓国・朝鮮」国籍を合わせて、528,904人。

3　朴三石『海外コリアン：パワーの源泉に迫る』P37による。

4　高賛侑『アメリカ・コリアタウン：マイノリティの中の在米コリアン』P120。移民の時期区分は文献により異なる。アジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学：記憶と創造』では、1903年から1905年の第1期、1905年から1945年の第2期、1950年から1964年の第3期、それ以降の第4期に区分されている。ここではより詳細に分類されている、高賛侑『アメリカ・コリアタウン：マイノリティの中の在米コリアン』の区分に拠った。

5　以下の移民史おける移民の数字は、高賛侑『アメリカ・コリアタウン：マイノリティの中の在米コリアン』に拠った。

6　1992年4月29日から5月1日の3日間にわたって起こった。このロドニー・キング事件を発端に起こった暴動は史上最大の被害をもたらした。ロサンゼルスカウンティ検視局の発表によれば、死者は韓国人1人を含む53名、負傷者4000名にのぼり、そのうち人種が確認された死亡者の内訳は黒人17名、ヒスパニック系15名、白人5名、アジア系2名となった。財産被害は火災発生5300箇所、被害総額7億5000万ドルで、当時約930億円相当であった。そのうち韓国人の被害件数は2200余件で、損害は全体の半分に近い3億4500万ドルに達する。このロス暴動が起きた原因は、ロドニー・キング事件で表面化した、アメリカ社会が長年抱えてきた人種差別にあったことは明白である。カリフォルニア州下院特別委員会が「暴動の勃発はロドニー・キング事件が起爆剤となったが、より直接的な原因はさる65年のワッツ暴動と同様に、貧困及び自暴自棄心理の影響のためだったと結論付けた」と、発表したことからもうかがえる（高賛侑『アメリカ・コリアタウン：マイノリティの中の在米コリアン』P47）。

7　ロス市警は暴動が起こるとすぐに白人地域に対する警戒を強化したが、逆にコリアタウンはほぼ無防備状態におかれる。このことから、ビバリーヒルズまで到達した暴徒達が、警官や私設警官から阻止され、逆にコリアタウンに流れ込むこととなった。在米韓国人の商店は、サウスセントラル内の店舗の60%を占めていたことから被害は甚大だった。また、警察署や消防署などに救助要請を行ったものの、実際には救援には来ないことが多かったことからも被害が拡大した。ロス暴動後に出されたウィリアム・ウェブスター特別調査委員会の非公式発表で、「市や警察行為関係者に非常事態に対処する能力が無く、互いに責任をなすりあったことが犯罪を拡大させた」と批判されたことからわかるように、全体としての対応にも原因があるが、コリアタウン周辺の警備についての方針によっても、被害が拡大したと思われる（高賛侑『アメリカ・コリアタウン：マイノリティの中の在米コリアン』P41）。

8　以下本文中のセリフの引用は、それぞれの映画に拠った。
9　村上由見子『アジア系アメリカ人：アメリカの新しい顔』P64。
10　高賛侑『アメリカ・コリアタウン：マイノリティの中の在米コリアン』P27。
11　トロットとは韓国の古い歌謡を指す。日本の演歌のようなものである。
12　「ムグンファ」は日本におけるむくげのこと。広辞苑第5版には「アオイ科の落葉大低木。インド・中国の原産で、日本で庭木・生け垣として広く栽培。高さ約3メートル。枝葉繊維が多く折れにくい。夏から秋にかけて一重または八重の淡紫・淡紅・白色などの花をつけ、朝開き夜しぼむ。」とある。このことから映画中の植木鉢に植えられている花は、ムグンファではないことがわかる。
13　以下の数字は、伊東順子『病としての韓国ナショナリズム』に拠った。
14　U.S. Citizenship and Immigration Services 『Yearbook of Immigration Statistics.』に拠った。
15　朝日新聞大阪社会部『海を渡る赤ちゃん』P117。
16　木宮正史『韓国：民主化と経済発展のダイナミズム』P78。

参考映像資料

ペ・チャンホ監督, チェ・インホ脚本.『キプコ・プルン・パム（ディープ・ブルー・ナイト）』東亜輸出公司, 1984）
ジャン・ギルス監督, オ・ヒョンミ, コ・ジンマン, ジャン・ギルス脚本.『Western Avenue』（Neo Sense, 1993）
イ・ジャンス監督, ソン・ジナ脚本.『LOVE』（Spectrum DVD, 2000）

参考文献

明石紀雄, 川島浩平編.『現代アメリカ社会を知るための60章』（明石書店, 1998）
朝日新聞大阪社会部.『海を渡る赤ちゃん』（朝日新聞社, 1995）
アジア系アメリカ文学研究会編.『アジア系アメリカ文学：記憶と創造』（大阪教育図書, 2001）
石坂浩一, 舘野晳編.『現代韓国を知るための55章』（明石書店, 2000）
伊藤章編.『国民国家とエスニック・マイノリティの現在：言語文化政策を軸としたマジョリティ=マイノリティ関係論』（北海道大学言語文化部, 1998）
伊東順子.『病としての韓国ナショナリズム』（洋泉社, 2001）
木宮正史.『韓国：民主化と経済発展のダイナミズム』（筑摩書房, 2003）
高賛侑.『アメリカ・コリアタウン：マイノリティの中の在米コリアン』（社会評論社, 1993）
国際知的交流委員会日本委員会編.『アスティオン59：アメリカを世界はこう見る』（株式

会社阪急コミュニケーションズ, 2003)
小林孝行.『変貌する現代韓国社会』(世界思想社, 2000)
佐藤忠男編.『アジア映画小事典』(三一書房, 1995)
ジョン・ハイアム. 斎藤眞, 阿部齊, 古矢旬訳.『自由の女神のもとへ : 移民とエスニシティ』(平凡社, 1994)
高崎通浩.『世界の民族地図 : 改訂版』(作品社, 1997)
仁科健一, 舘野晳編.『異邦の韓国人・韓国の異邦人』(社会評論社, 1996)
田中道代.『アメリカの中のアジア : アイデンティティを模索するアジア系アメリカ人』(社会評論社, 2001)
扈賢賛. 根本理恵訳.『わがシネマの旅 : 韓国映画を振りかえる』(凱風社, 2001)
ナンシー・グリーン. 村上伸子訳.『多民族の国アメリカ : 移民たちの歴史』(創元社, 1997)
朴三石.『海外コリアン : パワーの源泉に迫る』(中央公論新社, 2002)
H・ハクウォン・ソヌー. 山下邦明訳. 関寛治, 梶村秀樹編.『アメリカのディレンマ : そのアジア政策と韓国民衆』(世界書院, 1984)
原尻英樹.『コリアンタウンの民族誌 : ハワイ・LA・生野』(筑摩書房, 2000)
村上由見子.『アジア系アメリカ人 : アメリカの新しい顔』(中央公論社, 1997)
森山茂徳.『韓国現代政治』(東京大学出版会, 1998)
四方田犬彦.『電影風雲』(白水社, 1993)

Elaine H. Kim, Eui-Young Yu. *East to America : Korean American Life Stories*. New York: The New Press, 1996.
Jenny Ryun Foster, Frank Stewart, Heinz Insu Fenkl. *Century of the Tiger : One Hundred Years of Korean Culture in America*. Honolulu : University of Hawaii Press, 2003.

参考WEBサイト

総務省「http://www.stat.go.jp/」
Korean Embassy in Japan.「http://www.mofat.go.kr/」
U.S. Census Bureau.「http://www.census.gov/」

The Korean American in Korean Movies

Recently in Japan, Korean culture is very popular. We eat *pul-gogi* or *kimchi* and enjoy songs by Korean artists. And so many Japanese people visit South Korea with very reasonable cost all year around. Since the World Cup which was held by Japan and Korea together, many people feel Korea nearer than before. More people begin to learn Korean language, history and culture.

When we talk about "*kankoku*," it's restricted to South Korea. But at this time, many Koreans live outside of Korea all over the world. Approximately more than 6 million people are outside of Korea now. There are 2 million people each in America and China, and 600 thousand people in Japan. They cannot be separated from Korean history because the main reasons why they immigrated from their own country to foreign countries are closely connected to Korean history.

In this graduation thesis I want to focus on immigrants to America because America has had the strongest influence upon Korea today. In the first chapter I shall look at the history of Korean immigration to America, and the background of 1970s and 1980s in Korea through the movie "Deep blue night." In the second chapter I want to study the immigrants' lives and the problems in America through the movie "Western Avenue." which covered the Los Angeles Riot. In the third chapter I shall treat the international adoption as one side of Korean immigration through the movie "Love" in which Korean international adoptees are described.

Studying these three movies, I want to see how immigration to America and Korean history are strongly connected. And also I want to look at the fact that immigrants are not a marginal existence of Korean culture but have strong influence on the Korean people in South Korea in many ways today.